

[月刊] キリスト教書評誌

本のひろば

出会い・本・人

『神学大全』との出会い 山本芳久

鼎談

『牧師とは何か』(日本キリスト教団出版局)刊行記念
今、牧師とは何か、牧師とは誰か

石井智恵美×上林順一郎×越川弘英

本・批評と紹介

K.シュミート 著/山我哲雄 訳

旧約聖書文学史入門 飯 謙

樋口 進 著

古代イスラエル預言者の特質 大島 力

山口里子 著

いのちの糧の分かち合い 佐藤 研

豊田忠義 著

全キリスト教、最後の宗教改革者

カール・バルト 関田寛雄

牧田吉和 著

改革派教義学1 序論 藤掛順一

森田 進&森田直子 著

詩画集 美と信仰と平和 坂井信夫

西原廉太 著

聖公会の職制論 加藤博道

木下裕也 著

植村正久の神学理解 吉馴明子

エッセイ

ギリシャ人にはギリシャ人のように

『聖書は物語る 一年12回で聖書を読む本』

大頭真一

アルノ・グリユーンの「心理学」との出会い

村椿嘉信

『日本YMCA人物事典』の刊行に寄せて

鈴木範久

既刊案内

書店案内



2 FEBRUARY
2014

1月の新刊 (価格は本体価格)

歴史的名著の全訳、
上下巻で刊行!



アウグステイヌス
金子晴勇ほか訳

キリスト教古典叢書 神の国上

目次から

失われたものとの出会い
詩篇——対話としての祈り
旧約聖書にみる救済史と創造信仰
ヤハウイストの原初史にみるユーモアとアイロニー
「苦難の僕」と贖罪信仰

旧約聖書に見る ユーモアとアイロニー

月本昭男

● 本体1,600円

旧約聖書学・古代オリエント学の碩学による最新の講演集。若者向けにやさしく語った講話から、一般向けの詩篇講解、現代聖書学研究の手法を見事に示す原初史研究、第二イザヤにおける「贖い」についての講演まで、(聖書の学び)を多角的に味わうことのできる5本の講演を収録。



『新約聖書』の理解に不可欠の資料集!

イエス・キリスト ユダヤ民族史 III

時代の

E・シユラー 小河陽ほか訳 ● 本体9,000円

イエス時代のユダヤ教を知る歴史資料



パレスチナ政治史に続く本巻では、パレスチナの文化的背景、ヘレニズム的諸都市やユダヤ人の領域、サンヘドリンなどの政治制度、祭司職や神殿などの宗教制度について、当時の歴史史料を原典に即して引用しながら詳細に解説する。

好評発売中!

J・H・チャールズワース 中野実訳
『これだけは知っておきたい 史的イエス』

● 本体2,900円

古代教会最大の思想家アウグステイヌスの代表作の一つであり、西欧の国家論・歴史哲学理論の形成に大きく寄与した記念碑的大著の全訳。上巻(第1巻—第13巻)では異教徒からの非難に対する弁証論を中心に、世俗史である「地の国」の歴史を論じる。

● 本体6,200円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549
本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e shop 教文館



出会い・本・人

『神学大全』との出会い——山本芳久

私は、哲学の研究者として、トマス・アクイナスの『神学大全』を二〇年にわたって読み続けてきた。「『神学大全』との出会い」と題したこの小文においては、私がどのような経緯で『神学大全』を読み始めるようになったのか、ということ語るべきなのかもしれない。だが、ここで語りたいのは、そのことではない。

邦訳において全45巻にも及ぶ巨大な『神学大全』という本は、長年の探究を経ても、いまだその全貌を私に顕わにはしていない。日々新たな側面を開示し続けている。「『神学大全』との出会い」は、単に或る時点において一回限り起こった過去の出来事ではない。私は、いま現在『神学大全』に出会い続けているのである。だが、よく考えてみれば、これは巨大な『神学大全』との出会いについてのみ言えることではなくて、出会うに値するすべてのものとの出会いについて言えることではないだろうか。伴侶と出会う、よき師と出会う、友に出会う、と我々が言う時、それは実は、生涯をかけて出会い続けるべきものと出会った、という意味なのである。

『神学大全』とのより深い出会いを求めて、私は、母校である東京大学以外にも上智大学の講義にも出席し、よき師友に出会った。壮年の先生方を中心に開催されていたトマス会という読書会

に参加したり、遠方のトマス研究の第一人者の先生と文通したり、中世哲学研究の一大拠点であるアメリカ・カトリック大学に留学もした。このような様々な場所で出会った師友のなかの幾人かとは、濃淡様々な出会いを今でも続けている。故人となった方もいるが、そのような場合でも、「あのときのあのアドバイスはこのような意味だったのではないか」と初めてその真意に気づき、あらためて出会いを深めることもある。

いま現在の私の研究は、必ずしも、『神学大全』を中心とするものではない。ラテン・キリスト教世界の哲学を代表する同書のみではなく、同時代においてイスラーム世界やユダヤ教界において展開していた哲学思潮の比較研究へと探究の範囲を広げているからである。だが、このような新しい領域へと探究の範囲を広げることができるとも、その根底に、そのような比較研究の核となる『神学大全』との出会いが息づき続けているからなのである。

『神学大全』との出会いが核となつて、私は、他の様々な師友や書物との出会いを重ねてきた。すなわち、出会い続けるに値する多くのものとの出会ってきた。このような仕方でも様々な出会いの基盤となる書物に若き日に出会えたことは、本当に幸せなことだと思ふ。（やまもと・よしひさ＝東京大学大学院総合文化研究科准教授）

今、牧師とは何か、牧師とは誰か

鼎談

石井智恵美 × 上林順一郎 × 越川弘英

神奈川・まぶね教会牧師

愛媛・松山教会牧師

同志社大学教員

『牧師とは何か』執筆者

『牧師とは何か』監修・執筆者

読者が問い始めるための

「叩き台」として

越川 『牧師とは何か』の執筆に関わった私

と石井さん、そして読者として上林さんに来ていただきました。上林さん、本書にどんな感想をお持ちですか？

上林 これまでも牧師論がなかったわけではないですが、翻訳書か、外国の「ハウトゥーもの」を日本語で書いたような本でした。この本は今、日本の現場で

活躍中の牧師たちが、自分の問題や課題を精いっぱい書いた、画期的な本だと思います。ただ書き手が牧師ばかりで、信徒の発言がないのが残念ですが、

越川 ありがとうございます。私が本書の企画時に考えたのは、今、社会も教会も非常に流動的な状況にある中で、牧師の仕事を固定的に捉え、「これぞスタンダード」というものを打ち出せる状況にはないということでした。ですから本書も、一八人の牧師・神学者がそ

れぞれに「牧師とは何か」という問いの前に立ち、自ら答える試みであり、あくまで試論です。それを提示するところで、今度は読者のみなさんが「牧師とは何か」を自分で問い始めるための「叩き台」「土俵」みたいなものを示したいというのが最初の願いでした。

石井 私は牧師になって日が浅いこともあり、各々の論考がとても参考になりました。みなさんこういう苦勞をして、こういう工夫をしているんだな、と。

何度も読み直したい本だと思いました。

牧師として

枯れてしまわないために

上林 本人がいるから言うわけではないですが、石井さんが書かれた「今、問いなおされる牧師像」は、とても大切な問題を提起していると思います。

石井 苦しみながら書いたのうれしいです。

これほど締め切りを破ったのは初めてでした。今、牧師の何が問いなおされているのか、と自分なりに考えて、「全体へのまなざしの欠如」「牧師の権威とは何か」「靈性訓練」等、ここ

だけは外せないという点を書きました。越川 石井さんの文章は、リアリティがあつて、衝撃力がある。そして現在の分析が未来の課題へとつながっていく。書くのに難しい文章だったでしょうね。

上林 石井さんが最後に取り上げた「靈性訓練」は特に大切な点ですね。「坊さん

は歳をとつたら高僧、名僧と呼ばれるけど、牧師は歳をとるにつれて俗っぽくなる」と言った人があるけど、自分を考えてみても当たっていると思います（笑）。それはなぜなのか、と考えると、やつぱり修練なのかな、と。例えば、坊さんは毎朝木魚を叩いてお経をあげるけど、そういう祈りの修練が身に付いた牧師はどれくらいいるでしょうか？

石井 そうですね。この本にも書きましたけ

ど、訓練とか瞑想ということのプロテストは切り捨ててきましたよね。私はそこに危機感を感じています。源泉と切り離されてしまっているから、多くの牧師が枯れていってしまうのではないのでしょうか。私は二十代の初めに、「高森草庵」というカトリックの押田成人神父さんが主宰していた共同体に出会いました。いろんな人が共に暮らし、共に労働し祈る場でした。押田神父はキリスト教の信仰を生きなが



越川弘英（こしかわ・ひろひで）

1958年生まれ。同志社大学神学部、シカゴ神学校に学ぶ。日本基督教団中目黒教会、巣鴨ときわ教会牧師を経て、現在、同志社大学キリスト教文化センター教員。



上林順一郎 (かんばやし・じゅんいちろう)

1940年生まれ。同志社大学神学部に学ぶ。日本基督教団早稲田教会、吾妻教会牧師を経て、現在、松山教会牧師、日本聖書神学校講師、聖公会神学院講師。

よる情報発信に傾いていきました。それが行き着く先が「牧師は説教だ」という理解です。でも本当にそれだけでいいのか。語り続けていたら枯れてしまうのではないか。この石井さんの指摘は大切ですね。

自分は何によって立てられているのか

上林 石井さんはもう一つ、大事な点として権威の問題を扱っていますが、これは越川さんの文章「教会のリーダーとしての牧師」とつながっていますね。カトリックでは、「司祭は神によって立てられた聖職者」という意識が教会の中にあり、司祭さんの権威を自然に認めているのではないのでしょうか。でもプロテスタントは「万人祭司」ですから信徒と牧師に本質的な違いはない。今日、牧師が直面している難しさに「権威の問題」があると思います。も

ら、すべての人に開かれた源泉を示して、その出会いは私にとってまことに大きなものでした。そこで座禅を習い、以来、自分なりに霊性の訓練とということを探求してきました。

上林 なるほど。私は聖公会神学院で教えているんですが、そこでは学期ごとに一週間、修道院に行き黙想と祈りに集中するんです。そういう訓練は必ず現場に出てから役立つでしょう。沈黙が大事なんですよ。天地創造で神さま

が七日目に「安息なさった」とありまして、これは休んだということだけでなく、神さまが沈黙したということだと思います。牧師は働きすぎで、しゃべりすぎです。

石井 そうですね。沈黙と、それから姿勢と呼吸がとても大切だと思います。越川この点は、確かにプロテスタント教会が削ぎ落としてきたことです。礼拝をとつても、沈黙や所作の大切さに目を配るのではなく、論理化された言葉に

う一方では、牧師が教会の中で「暴君的」存在になる危険性も指摘されています。牧師が依って立つ権威とは何か、それはどのように発揮されるべきかという問いは、きわめて重要ですね。

越川 まず基本的なことを確認すれば、牧師の権威は、神からの召命に基づく、「上からの権威」と、遣わされた教会の会衆から委託される「下から権威」によって成立しているわけです。その権威を自覚しつつ、それを正しく用いているか常に神と周囲からチェックを受けるという意識が、牧師には必要ですね。

石井 女性教職として肌身を感じるの、女性リーダーシップをとることに違和感をもつ方々がいる、ということですか。そういう時に、自分が何をもって立てられているのかという問題に立ち返るわけですが、やはりこの二つの権威に立つしかないと感じています。そして時には周囲に誤解されても、神に折りながら決断していくしかない。孤独

な仕事ですね、牧師って。

越川 本当に、その通りだと思います。本質的には男性牧師も同じ経験をしています。そしてさらに聞きたいのは、では牧師のリーダーシップとは何かということですか。私は「構想力」に行き着くと思うんです。自分たちの教会はこれからどうあるべきなのか、どういう教会を作り上げていくのかを教会員と共に構想していく、その際にリーダーシップをとるのが牧師なのだと思います。

上林 越川さんは、この本で三つの形のリーダーシップを説明していましたね。

越川 これまでは牧師のリーダーシップと言えば、トップダウン型のモデルでしか考えていなかったように思うんです。しかし本当は、牧師のリーダーシップには、もっと多様なあり方があるのではないか。この本で私は「後ろから歩む」「先頭に立つ」「共に歩む」という三つの側面から、牧師のリーダーシップを理解することを提案しました。



石井智恵美 (いしい・ちえみ)

1960年生まれ。同志社大学神学部、韓国・梨花女子大学、ドイツ・ミュンヘン大学に学ぶ。現在、日本基督教団まぶね教会牧師、農村伝道神学校講師、立教大学非常勤講師。

牧師と教会員の関係性を多角的に捉える助けになればと願っています。

牧師とは「何か」から 牧師とは「誰か」へ

上林 このリーダーシップの問題とも深く関わるのですが、今、牧師が抱えている大きなストレスは、こういうことだと思っただけです。それは教会が、日本社会に浸透している成果主義に巻き込まれてしまつて、教会員も牧師もいわゆる「教勢」に追われているということだと思います。教会員がリーダーとしての牧師を評価する時に、教勢が指標となつていきますよね。『教団年鑑』という日本基督教団が毎年出している年鑑がありますが、これが出て、牧師がまず見るのは、巻末の統計表ですよ。そして周囲の教会や、友人の教会の教勢を確認して、一喜一憂する。あれはやめたほうがいい(笑)。

石井 牧師が病んでいく、つぶれていく、枯れていく。そういう牧師の危機の背景にこの思考法があるんでしょね。

越川 そう思います。戦後の日本の教会は、教会の成長発展を理想とし、それを先頭に立って率いていくのが牧師であると考えてきました。その理解は牧師自身にもなお根強くあつて、だから一生懸命準備して説教しても成果が出ないという現実の前に、深い徒勞を感じてしまふ。そういう中で今、成長発展モデルではない教会観・牧師観が大事になつてきていると考えています。

石井 具体的にはどうですか？

越川 仲間たちを見てみると、例えば成長発展しないけど多様な人がいて、しぶとくがんばっている教会とか、牧師が心の病を抱えつつ信徒がそれを支えて、良い働きをしている教会とか、各地で新しいモデルを作り始めている例があります。違う教会モデルがあるんだと、違う牧師と信徒のあり方があるんだと

いうことに、みんなが気づくようになって、日本の教会は変わるのでないか。元気になるのではないか。本書がそういう教会観・牧師観の捉え直しのきっかけになれば、うれしく思います。

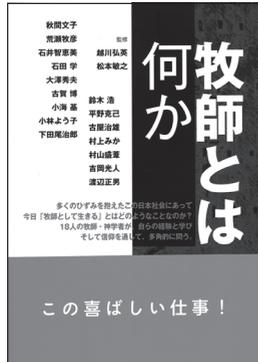
上林 この本は「牧師とは何か」という問いを掲げていますが、私はこの問いは「牧師とは誰か」という問いに深められていくべきだと思います。「何か」は牧師の機能や役割を問う問いですが、「誰か」と問うとき、牧師の存在自体を問う問いになります。この問いの転換が、越川さんの言われたモデルの転換にもつながると思います。ある調査でカトリックの信徒が司祭にいちばん期待するのは、「自分たちを神さまに導いてくださること」とありました。牧師も同じですよ。存在の全体をかけて、人々を神さまに導いていく。そういう視点から、牧師という存在を捉え直すことが必要なのだと、この本を読んで今感じています。

「今、ここ」を生きる現代日本社会の牧師像に迫る!

牧師とは何か

越川弘英／松本敏之 監修

現代日本社会にあって、牧師がなすべき仕事とは何か？ 牧師について聖書は何を語り、神学は何を論じてきたのか？ 18人の牧師が、「今、ここ」を生きる牧師の姿を多面的に浮かび上がらせていく。日本の文脈を大切にしながら、具体的、経験的、神学的に記された牧師論は、牧師とは何か、を読者が自ら問うための、良き対話相手となるだろう。



A5判 並製・386頁
本体4,600円+税

読者より

「こういう本が出るのを待ってました!」
「日本の牧師たちの苦闘と喜びが伝わる、画期的な本ですね」
「全部賛成というわけではないですが、でもよい本です」
「涙が出てきました。苦勞しているのは自分だけじゃない、と」

目次

第1部 牧師の働き

- 第1章 教会のリーダーとしての牧師(越川弘英)
- 第2章 礼拝者としての牧師(荒瀬牧彦)
- 第3章 説教者としての牧師(平野克己)
- 第4章 牧会者としての牧師(松本敏之)
- 第5章 カウンセラーとしての牧師(吉岡光人)
- 第6章 伝道者としての牧師(石田学)
- 第7章 証し人としての牧師(小海基)
- 第8章 地域住民としての牧師(小林よう子)
- 第9章 教育者としての牧師(大澤秀夫)
- 第10章 管理責任者としての牧師(古屋治雄)

第2部 様々な牧師像

- 第1章 神学的に見た牧師像(下田尾治郎)
- 第2章 聖書から見た牧師像(村山盛葦)
- 第3章 歴史的に見た牧師像
—初代教会・中世を中心に(鈴木浩)
- 第4章 歴史的に見た牧師像
—宗教改革期を中心に(村上みか)
- 第5章 今、問いなおされる牧師像(石井智恵美)

第3部 牧師の人生

- 第1章 牧師の毎日(秋間文子)
- 第2章 牧師の生活(古賀博)
- 第3章 牧師の一生(渡辺正男)

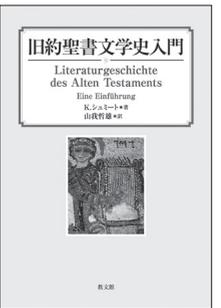
ホームページで、試し読みができます!

<http://bp-uccj.jp/publications/book/4818408555/>

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL 03-3204-0422 FAX 03-3204-0457
ホームページ <http://bp-uccj.jp> Eメール eigyuu@bp.uccj.or.jp (表示価格は税別)

最新の研究に基づいた、大胆な枠組みによる究明
K・シュミット著
山我哲雄訳

旧約聖書文学史入門



飯 謙

「文学史入門」の名の下で、旧約聖書学を包括的に叙述する新しい書物が出版された。著者のコンラート・シュミットは一九六五年生まれ。原著（二〇〇八年）の出版は四〇歳代前半ということになる。「訳者あとがき」で紹介されたウェブサイトから、彼がチューリヒやミュンヘンの神学部に学び、牧会に従事した後、チューリヒ大学の助手を経て一九九九年にハイデルベルク、二〇〇二年よりチューリヒ大学教授——という華やかな経歴を知らされた。業績は五書、預言者、諸書と旧約学の全領域に及び、著書・論文は膨大な数に上る。われわれには、この種の「概説書」は、研究歴を重ねた大家の仕事といった先入観がある。シュミットは、若いがすでにその域に足を踏み入れた、確実に明日の旧約学をリードする人物なのだと思えた。

いま述べた「先入観」の話を継ぐと、わが国旧約学の大家、関根正雄氏が同じような書名の本を出版しておられる（『旧約聖書文学史』上・下、岩波書店、一九七八、八〇年）。その中で氏は伝統的な緒論学、イスラエル史、旧約神学・思想史の有機的な関連性を、文献社会学の観点を取り入れて大胆に展開し、

輝かしい成果をあげておられる。シュミットの取り組みは、近年の考古学的な情報や、それに基づく古代オリエント諸宗教の歴史、アナール学派以降の社会史など、一九八〇年代以降に一般化した認識を組み込んでいる。この書ではもはや（二〇世紀中葉までの研究史の記述を除けば）ヤハウイストもダビデ・ソロモン時代の栄華も語られない。いわゆる統一王国時代は、まだ文学的活動が開始される以前の状況にあったというのである（九三、一二二頁）。

そういうことで、かなり重厚な序論（旧約聖書文学史の課題、歴史、諸問題）に続く文学史部分は、「アッシリア到来以前」とする時代設定から始まる。以下、アッシリア時代（前八―七世紀）、バビロニア時代（前六世紀）、ペルシア時代（前五―四世紀）、プトレマイオス朝時代（前三世紀）、セレウコス朝時代（前二世紀）として区分され、それぞれ一つの章を構成する。最終章は「聖典化と正典形成」という表題で、全体を締め括る。従来、古代イスラエル史でヘレニズム時代として括られることが多い二つの時期が、個別に厳格に論じられる点にも特徴を見

ることができると思える。シュミットはこの区分によって、イスラエルの文学史を、古代オリエントの覇者による「文化圧力」（七九頁）の中で解釈しよう意図している。

各章の議論は「歴史的諸背景」、「神学史的特徴づけ」、「伝承諸領域」という同じ枠組みで進められる。シュミットはこれによって旧約テクストの原初形態を問ひ、その発展や受容と理解の究明を試み、一定の成功を収めている。たとえばアッシリア時代であれば、最初の「歴史的諸背景」は、単なる出来事の羅列ではない。当時の産業構造や交易、朝貢など社会の状況に触れ、北王国滅亡後に残されたユダが大国アッシリアによる文化的吸収という危機に直面しながらも、逆にアッシリヤによる文化の書庫建設に感化されて、文学の創作振興や収集を課題とし、文学史における新たな段階を迎えたことが述べられる。神学史の面では、アッシリアの民族宗教との対決が初めてイスラエルの信仰を神学の形成に導いたことが強調される。旧約の著述家

は神ではなく王と民を弾劾する。その中でモーセや士師伝承のような、王なき起源伝説を形成した。他方、南で王権を維持する側は王を寿ぎ、またその制度に固執する立場を鮮明にする。そしてアッシリアから強要された神観念を逆手に取る申命記王を掲げ、アッシリア文化の受容と転用を跡づけていく。「訳者あとがき」にあるが、著者はこの書でかなりの造語を提示している。山我氏はそれを適切な邦語に置き換えて、また随所に気の利いた補足を配し、この書を教段分かりやすく仕上げてくれている。その労に心より謝意と賛辞を送りたい。

（いい・けん 神戸女学院大学学長）
（A5判・四三二頁・定価四七・五五円（税込）・教文館）



新刊 宗教改革 500周年とわたしたち 1

ルター研究 別冊1号

ルター研究所 編

●A5判並製 定価2000円+税

問題提起：
ルターの現代的意義を問えば
—「宗教改革五〇〇年と私たち」
を考えるために
徳善 義和

ルター・プロテスタンティズム・
近代世界
—宗教改革五〇〇年のために
江口 再起

ルターの宣教の神学と今日の
ルター派の宣理解（1）
江藤 直純

『ルーテル教会信条集（一致信
条書）』の邦訳の歴史的背景と
意義
ティモシー・マッケンジー

ルター、エラスムス、
エンキリディオン、悔い改め
高井 保雄

ルターの讚美歌考
—『バプスト讚美歌集』
（一五四五年）に見る
徳善 義和

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

類書少ない必読の書

樋口 進著

古代イスラエル預言者の特質

伝承史的・社会史的研究

古代イスラエル預言者の
特質
伝承史的・社会史的研究
樋口 進著

大島 力

長年、教会における伝道・牧会をしつつ、同時に旧約聖書学の研究を継続してこられた樋口進氏が、一〇年ほど前に関西学院大学に転じられ集中して執筆された預言者研究の成果が、この度一冊の書物として纏められた。その目次を読むならば、古代イスラエルの初期預言者からはじまり、紀元前八―六世紀に集中して出現した「古典預言者」を歴史的にほぼ網羅し、なおかつペルシア時代以降になされた「預言書の正典化」の問題にまで説きおよび包括的な歴史的研究であることが分かる。この種の研究書は、日本において個別の預言者研究が学会等で比較的盛んななされているにもかかわらず、意外なほど数少ない。翻訳書として日本語で読めるものとしては、樋口氏自身が訳されたJ・ブレンキンソップの『旧約預言の歴史―カナン定着からヘレニズム時代まで』（一九九七）とK・コッホの『預言者I』（一九九〇）『預言者II』（二〇〇九）等がある。しかし、日本人の手による著作は、一般向けに書かれた木田献一氏の『古代イスラエルの預言者たち』（一九九九）の他は、本格的かつ包括的研究書は近年、出版されていない。その意味で、本書

は今後、日本において旧約預言者の研究を進める者にとって必読の書となるであろう。

著者の基本的な問題意識は、なぜ古代イスラエルにおいて、王国時代の八世紀から六世紀にかけて、多くの預言者が出現したのかという根本問題の解明である。そのことに関して、古くはM・ヴェーバーの宗教社会学的研究があるが、それをさらに推し進め、従来から旧約聖書学においてなされてきている伝承史的研究と社会史的研究を駆使して、新たな知見を得ようと試みている。そして、結論として導き出されている見解は、土地取得と王国建設の間に想定される部族連合時代における、ヤハウエとイスラエルの契約関係に基づく法を担うことが預言者の職務であった、というものである。すなわち、カナン定着後、ヤハウエ宗教は様々な危機に遭遇したが、そのことを背景にして預言者は出現し、部族連合時代の契約に違反する国家と民に対して「罪の告発」と「裁きの宣告」を行ったのである。この預言者理解は伝承史的研究として概ね妥当なものと言えよう。

しかし、著者が特に探求しているのは、その預言者活動を支

えた支持グループの同定である。預言者は単独で活動を行ったのではなく、彼らを支えたのは、やはり部族連合時代からのヤハウエ主義者であったという。そのことを著者は個々の預言者を取り上げながら伝承史的に検証している。例えば、最初の古典預言者であるアモスに関しては、「アモスは部族連合時代からの伝統（特に「契約の書」）に基づいて、支配者階級を批判したのである」と記している。また、バビロン捕囚末期に「解放の希望」を告げた第二イザヤについても「第二イザヤは、捕囚以前の『ヤハウエのみ運動』を展開したヤハウエ主義者（特に、レビ人、エリヤ、ホセア、申命記を担ったグループ）の伝承を受け継いだ者と考えられる」と記している。このように、様々な伝承史的検討を経た上ではあるが、著者は一貫して預言者を部族連合時代以来の伝統に立つ存在と理解し、その伝承を担った諸グループが預言者の活動を支持したと論じている。

さらに、そのことは預言書が最終的に纏められ「正典化」していく過程においても適用されている。旧約聖書の正典化の問題は実に様々な問題をはらんでいる。しかし、まず最初に「律法」（トーラー）がペルシア時代に正典化されたことは間違い

ない。それに次いで、「預言者」（ネビイム）の正典化が紀元前二〇〇年頃にはなされたと考えられる。但し、その「律法」と「預言者」の正典化は、実際にはある時期、同時並行的に「緊張関係」の中でなされていった。それは、申命記（律法の最後の書）とマラキ書（預言者の最後の書）の結びの部分の「預言者」理解の相違を見れば明らかであろう（この点に関して評者は著者と同じ認識である）。但し、樋口氏はさらにその「律法」と「預言者」の最終編集を担ったグループを追究し、前者を第二神殿時代に支配的であったツアドク系祭司とし、他方「預言者」の最終編集を「下級の祭司」であるレビ人に帰している。

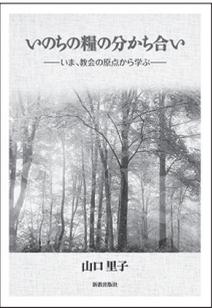
本書は包括的な預言者研究であり、また「正典化」の社会史的考察にも刺激を与えている。さらに今後、第二イザヤ以降の「第三イザヤ」あるいはゼカリヤ書二―一四章等の「黙示的部分」に関する論考を期待したいと思う。

（おおしま・ちから 青山学院大学教授）

（A5判・二九四頁・定価五二五〇円（税込）・新教出版社）

強烈な啓蒙の書
山口里子著

いのちの糧の分かち合い いま、教会の原点から学ぶ



佐藤 研

日本の代表的なフェミニスト神学者・山口里子氏の近刊。全体が序と八つの章からなる（紙面の都合で以下頁数は省く）。

序論の「はじめに」は本書の自己紹介。著者の『新しい聖書の学び』（新教出版社、二〇〇九年）が好評を呼んだため、本書はそれへの更なる応答として書かれた。ただし全体は、（おどろくほど多数の）講演の内容を束ねて、「教会の原点を学び直す話を中心に編集」し直したものである。

第一章は「いま、教会の原点から学びたい」。初期の、貧者中心の「教会」の基とは、「癒し・預言・共食」を核とし、「マコ」での「神の国実現を目指しつつ」、「霊的・政治経済的な抵抗運動」として展開したイエスの運動である。しかし、その教会にローマ帝国の「家庭訓」が導入され、運動は急速に「父権制化」し、性差別的なピラミッド構造へと「初心を变质させ」ていった。

第二章は「『主の祈り』を学び直す」。「主の祈り」の原型が解説される。注目されるのは、各行がローマ帝国およびこの世の権力への抵抗として読まれ、全体が「弱さ」を「絆」にした

共生への呼びかけとされている点である。

第三章は「彼女を記念して」。「エリート男性」の書いた聖書の行間に「庶民女性」たちの声を回復すべく、「疑いの解釈学」を応用し批判的に読むことが提言される。その例として、「イエスに香油を注いだ女性の話」が挙げられる。元来の物語（マルコ一四章）は、「洞察力と尊厳を持った」女預言者がイエスの頭に塗油したという話であった。それが、「娼婦」がイエスの足に香油を注いだ話（ルカ七章）にまでねじ曲げられてしまった。

第四章は「母マリア」の身に起きたことを思いめぐらす。ここでは、（ローマ兵の強姦によって）「婚外妊娠」させられたマリアに落ち度を見ず、むしろそれを「聖霊の助け」と理解して「希望を見出した女性たち」が担った伝承が基盤に想定される。そのマリア像が時と共に変貌させられ、最後には男に女を「服従させる役割」をあてがわれるに至った。

第五章は「マグダラのマリアに出会い直す」。マグダラのマリアは「復活証言の中核」にいる人物であり、「実質的にイエ

スの一番弟子、一番の後継者」「最初の使徒」であった。ヨハネ福音書の「主の愛する弟子」も、元来は彼女のことであったろう。それが伝承の過程で、「男だけの聖職制度に最も邪魔な存在」であったために「凄まじい暴力」で貶められてしまった。

本書の中で最長の章であり、著者の想いが鮮明に出ている。第六章は「泣き寝入りさせないキリスト教へ」。いかにパウロが「父権制的」なレトリックを使い、コリントの教会で女性を抑圧したか、その断罪と告発の章。多くの（男性）パウロ研究者には耳が痛からう。

第七章は「聖餐…始まりを学び、これからを考える」。当初は無差別的な「共食」の伝承であったものが、教会が父権制的に変化する中、「食事と切り離された儀式」になり、結局は「人々を差別・分断し疎外する儀式・聖礼典」になってしまった。——もともと、結尾には新しい「ユークリリスト」の試みの例が語られる。

最後の第八章は「パレスチナの平和を願って」。「イエス・キリストを殺したのはユダヤ人」という通俗説と、現在のパレスチナ地域が「ユダヤ人への神の約束の地」というシオニスト俗説を学的に論駁し、真にパレスチナの平和を願うための課題が説かれる。同地の平和運動に熱心に関わっている著者の思いを証しする。

以上、紹介文だけで紙面が尽きてしまった。それだけ内容が多岐に亘る。フェミニスト的批判の目で貫かれた、興味の尽きない初期キリスト教研究書である。筆者個人としては、極めて多くの点で釈義的に賛同しないし、著者自身が幾度か引いている言葉通り、「人が何を見るかは、どこに立つかに依る」（G・グティエレス）ことを改めて思い知った。しかし、できるだけ広範に読まれるべき強烈な啓蒙の書であることは疑い得ない。

（さとう・みかこ）立教大学教員
（A5判・二六〇頁・定価三三〇円（税込）・新教出版社）

並木浩一 著作集2 全3巻



聖書を生み出した人々の生活と思想に向け「想像力」を馳せ、旧約テキストの本質と全体を掴む試み。

- 1 ヨブ記の全体像 好評発売中 4,000円
- 2 聖書の水脈 2014年6月刊行予定
- 3 旧約聖書の水脈

連続講演会のご案内

3回にわたり、著者自身が全3巻を解説
第2回「批評としての旧約学」
2014年3月15日（土）
*詳細はHPをご覧ください



アメリカ有数の説教者
アメリカ有数の説教者が、現代キリスト教葬儀について問う。それぞれ具体的に論述。

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp (価格税別)
<http://bp-uccj.jp>

イエス・キリストが信ずる信仰による神の義
豊田忠義著

カール・バルト
全キリスト教、最後の宗教改革者



関田寛雄

著書は本書の「まえがき」で次のように述べている。「私に本書を出版することを決意させたものは……カール・バルトの総体像についての私自身の表現欲求である」。次いでバルトの言葉を引用し、「教授でないものも、牧師でないものも、彼らの教授や牧師の神学が悪しき神学でなく、良き神学であるというように対して、共同の責任を負っている」と語っている。

この言葉の背後には、青学大での、いわゆる大学紛争の中で一学生としての著者が大学にも教会にも深く失望しつつ、唯カール・バルトとの出会いに必死に縋りつづけ、卒業後はひたすらバルトを読み続けて生きてきた闘いがあると思う。当時を顧みて教師としても牧師としても充分な対応ができなかった自らの負い目を想起するのみである。

著者は先ずバルト理解の基本的視点として八つのポイントを掲げ、それによって「バルトのどのような書物であれその内容を、単純に根本的にそしてトータルに把握することができる」と主張している。その全てをここに紹介することはできないが、少なくとも次の三つの点の指摘は重要であり、著者の視座に注

目したい。

一、神と人間との無限の質的差異
著者はバルトの『ローマ書』の序文から次の引用をする。「私が『方式』なるものをもっているとするれば、……時間と永遠との『無限の質的差別』……をあくまで固守した、ということである。『神は天にいまし、汝は地に在り』。私にとつては、この神とこの人間との関係、ないしはこの人間と神との関係が聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」。

二、神の側の真実＝主格的属格としての「イエスの信仰」＝啓示の客観的現実性

著者はバルトの『福音と律法』における、ローマ三・二二およびガラテヤ二・一六等の「イエスの信仰」の属格（所有格）を、「イエス・キリストが信ずる信仰による神の義」として、即ち主格的属格として認識し信仰したバルトの解釈を極めて重視する。そしてそれは「一切の近代主義、自然神学的な全キリスト教に対するアンチテーゼであり、また根本的かつ究極的な宗教改革の核となるものである」と主張する。従来多くの

翻訳において「イエス・キリストを信ずる信仰」とされる理解を著者は鋭く拒否し、そこに神の側の真実だけでなく人間の自主性、人間的契機の直接性に基づく自然神学的な、神人協働論の立場が残されていると著者は見るのである。

この点は著者のバルトから受けとった最も大切な見解であると言えよう。評者の言葉で言い換えれば信仰における認識は徹頭徹尾、神の側の真実と恩寵によるものであって、そこにおいて「神と人間との質的差異」は正に一貫されなければならないということであり、それが福音の事態であるというべきである。それは我々の不信をも無神をも包括してキリストが信じて下さったからこそ神の義は「何らの差別なし」に普遍的に人間を義とするのである。ここには神と人間との直接性（自然神学）は完全に排されている。

三、聖霊は人間精神と同一ではなく、神と人間の質的差異を神の側から結ぶべく、賜物として「その都度の神の自由な決断

による『聖霊の注ぎ』によって信仰の認識はもたらされる」。

このような視点から著者は著名な神学者たち、例えば大木英夫、佐藤優、滝沢克己、八木誠一、富岡幸一郎、寺園喜基、北森嘉蔵、吉永正義、倉松功、佐藤司郎、小泉健、喜田川信の諸氏及びドイツ系神学者たちとの鋭い対話を試みている。日本のバルト学界への一つの貢献と言えるのではあるまいか。

（せきた・ひろお）日本基督教団神奈川教区巡回教師
（新書判）二五四頁・定価一〇五〇円（税込）・キリスト新聞社

キリスト新聞社の本
Kirisuto Shimbun, Co., Ltd.



聖書入門

贈り物として「最適」

▼聖書の言葉がぐんと近づいてくる！ 現代人のためのハンディな手引書

好評発売中

アンゼラム・クリューン◎著
中道基夫、萩原佳奈子◎訳
本の中の本といわれる聖書を読むためのガイドブック。聖書の言葉が、現代を生きるわたしたちにとって身近になる！ 本書は、現代のわたしたちに聖書を読むための指針を与えてくれる。

【四六判】214頁・1100円

▼初めて教会に来た人には、こう見える！

もつと教会を
行きやすくする本

「新来者」から日本のキリスト教界へ
八木谷涼子◎著
はじめて教会に行った新来者が教会からどんな印象を受けたか、教会のどんな対応を好ましく思い、あるいはそう思わなかったかをイラスト満載で解説！ 牧師や教会役員におすすめの冊！

【六六判】98頁・1750円

キリスト新聞社
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51
和光プラザ2階
TEL. 048-424-2067 (郵格は税込)
E-Mail. support@kirishin.com
URL. http://www.kirishin.com

神の言葉によって生きる教会の形成を目指す教義学
牧田吉和著

改革派教義学 第一巻

序論



藤掛順一

『改革派教義学』（全七巻）は、既に第三巻「人間論」（市川康則著）が出版されているが、このたび第二回配本として牧田吉和氏による第一巻「序論」が出版された。全七巻の土台が据えられたという意味で、本書の出版の意味は大きい。

この「教義学」は「日本キリスト改革派教会」の神学校である神戸改革派神学校の二人の教授方によって執筆されており、「歴史的改革派神学」に自覚的に立つて記述されている。しかしそもそも「改革派教会」という言葉は「絶えず改革され続けるべき教会」を意味しており、「徹頭徹尾、公同教会に連なる真の教会を歴史の中で具現しようとする堅い決意を意味している」（一八頁）。この「改革派教義学」も、「御言葉に堅く立つ真のキリストの教会の形成に仕えんとする『公同的神学』たろうとするという強い決意」（一九頁）をもって書かれている。「徹底的に『教派的』であることが、徹底的に『公同的』であることはありうるのである」（五九頁）とあるがその通りである。「聖なる公同の教会」に連なる歴史的教会を日本において形成しようとする者は、どの教派に連なっていようと、本書から大いに学ぶところがあるはずである。

教義学の序論である本書は第一部が「教義学の概念と課題と方法」、第二部が「神認識の道」となっている。第二部は神認識の原理論であるが、「われわれが認識の対象とするのは神であり、三位一体の生ける人格的な神であり、しかも啓示において御自分を明らかにする人格的な神である」がゆえに、「人格的なその方を認識する道筋」を語るために「原理論」ではなく「道」という言い方を敢えて用いている。ここに、著者の基本姿勢が見て取れる。教理を単なる知識として語るのではなく、生ける人格的な神への応答に生きる群れとしての教会の形成に仕える教義学であろうとする意志が本書全体に貫かれているのである。

「神認識の道」は「啓示」によって開かれる。そしてそれは「一般啓示」「特別啓示」の区別を経て「聖書」論に至る。その聖書論の最後に「聖書と説教」の項があり、聖書論の確立と共に説教論も確立されなければならないことが指摘されている。このような問題意識もまた、神の言葉によって生きる教会の形成をこの教義学が目指していることを示していると言えよう。

本書の聖書論は十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのオラ

ンダの神学者、ヘルマン・バーフィンの聖書論を基礎として語られている。その理解を助けるために、本書の巻末には「H・バーフィンの聖書論——その基本的性格をめぐって」が付録として付けられている。その聖書論の中心となっているのは、「啓示の中心的事実、すなわち受肉は聖書へと導く」（一五〇頁）というテーゼである。これによって、神の子キリストの受肉と、神の言葉が聖書へと文書化されたことが類比的に捉えられ、キリストが「真の神であり同時に真の人間である」こととの類比によって、聖書が誤りのない神の言葉でありつつ同時に「人間的弱さと悔りと卑しさ」（二八二頁）をも持つ「歴史的文献」であることを位置づけることができるのである。バーフィンのこの聖書論は、一方で「伝統的正統主義」が啓示と聖書の区別を見失って、「聖書を『教理』の書とし、啓示を単に『教理の伝達』と考える誤った知性偏重主義」に陥っていることを批判し、他方でシュライエルマッハーの流れを汲

む神学が「主観的経験」を重んじてそれと客観的啓示とを分離してしまふことを批判している（二四三、四頁）。啓示と聖書との、区別されると同時に分離されない関係を明らかにしている点で、本書には健全で教会形成的な聖書論が展開されている。本書の記述は簡潔でわかりやすい。「できる限り信徒の方々にも理解していただけるように、少なくとも牧師の指導のもとで理解可能なように平易に叙述するように試みた」（あとがき）とある通りである。改革派神学の歴史において積み重ねられてきた様々な議論に全く疎く、特にオランダ系の神学者についての知識が全くない筆者も大変面白く読むことができた。カール・バルトの神学との対話が様々なテーマについてなされていることも本書を面白くしている要因の一つである。

（ふじかけ・じゅんいち）日本基督教団横浜指路教会牧師
（A5判・三〇〇頁・定価四二〇〇円（税込）・一麦出版社）



序論

〈改革派教義学〉第1巻

牧田吉和
Yoshikazu Makita



教会に仕える 教義学を問う！

教会形成の現場から、
教会形成に仕える
「教義学」とは何かを考える。

改革派教義学 全7巻
〈内容案内進呈〉

A5判・上製・函入
定価 4,200 [本体4,000+税] 円
ISBN978-4-86325-046-8



株式会社 一麦出版社

札幌市南区北ノ沢3丁目4-10

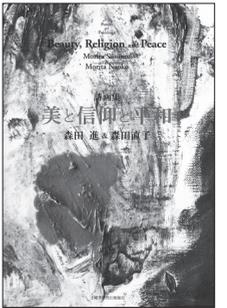
TEL (011) 578-5888

http://www.ichibaku.co.jp

携帯 mobile.ichibaku.co.jp

詩と絵画によるコラボレーション
森田 進 & 森田直子著

詩画集 美と信仰と平和



坂井信夫

本書は森田進の詩四〇篇と森田直子の絵四〇枚からなる詩画集である。夫妻によるこのような一書は、かなり珍しいといえよう。さて、初めに森田詩について述べたい。いまさらいうまでもないが、かれは二十代から詩人として活躍するかたわら、大学の教師、月刊『詩と思想』編集長、韓国詩の翻訳と出版、ハンセン病者の詩の発展、その他さまざまな文学の領域において超人的な活動をしている。怠惰なわたしなどは、いつも驚きながらかれの存在を見つづけてきた。ただひとつ不満に思っていたことは、本業の詩作がいささか手薄であったことだ。じつ、一九八五年に刊行された詩集『野兎半島』のあと、かれはずっと詩集を出してこなかったからである。

本書は、じつに二八年ぶりの詩集なのだ。むろん、これは厳選された四〇篇であり、たとえば日本キリスト教詩人会の機関誌『嶺』に発表されたが収録されていない作品がいくつもあつた。さて、本書のタイトルであるが、若いころのわたしならば、「なんと恥ずかしげもない」と思つたろうが、わたし自身がキリスト者となつたいまでは「なんとまっすぐに名づけたね」と

いいたい。はじめに森田進の詩について少しだけ述べたい。これとわたしは同年なので、世代的は体験はかなり共通しているが、しかし個別的なそれは、むろん異なっている。前者を詩史の面からみれば、四季派にはじまって荒地派・列島派をすぎた吉本隆明のいう〈修辭的現在〉までを共有している。ただ、森田進は日本のキリスト者詩人から多くを学んでいる点で、わたしとは違う。

かれの詩作品を大きづつばに分けると、次のようになる。①過去のできごとや体験に沿って語られる詩。②まったくの架空の物語。③新約聖書やイエスの教えを土台とした信仰詩。むろんこのように分けられるのを作者は否定するだろう。①にあたる作品において読む者が、あつと驚くのは、とつぜん現実／体験から想像の世界へと展開される、その表現である。たとえば「下関・朝鮮市場大通り」という詩では幻想と現実がまったく等価に展開されている。②には短詩「蛇」や「弔辞」など。後者は誰にむかつての弔辞かはわからないが『惨めな生の終わり／ぐらひは』ではじまり『ひとは抵抗が何の力もちえない時』

みことな虐殺をせずに引き受けたほうがましなのだ」と断言されている。おそらく、この時代そのものを、かれは告発しているのではないか。③は、もちろん森田詩の真骨頂であり、どれも信仰を核として花ひらいている。

でも、かれの詩は、宣教とか伝道のために書かれてはいない。むしろ、内なるデカダンス（＝文学）やデモーニッシュなもの、かれの〈信〉とがせめぎあつている場面こそが、かれの詩を成立させているなにか、である。

森田直子の抽象画を銀座でみたのは数年まえ、二回のみである。そのときの印象は、どれも明るく鮮やかだな、と感じたことだ。この書において初めて彼女の略歴を知ったのであるが、美学を研鑽したのちカウンセラーとなつたようだ。そののちは、ひたすら他者の声に耳を傾けつづけた日々があつた。それは一九八七年に二十歳の息子を失つてしまったという事実からやつてきたのかもしれない。彼女はただただ白いカンヴァスにむか

つて絵の具を塗りつづけてゆく。すると、そこに自らの内面がしだいに浮かびあがつてくる。それは、なにかへの償ひのように思えてならない。

銀座の個展で感じたものは、本書の絵を見ることによつて大きく修正された。自分の内面とか精神とかが、とにかく描きはじめてみないことにはわからない――すべての絵は、そう語つているように思えた。抽象画といえ、わたしにとつては（ニューヨーク派）である。かれらのうち二人か三人は自死している。まっ黒に塗りつぶされた画布のさきには〈死〉しか残されていなかったからだ。でも森田直子の絵は、癒しと恐怖のふたつをともなつて、わたしたちのまえに出現する。「まだ生きられるのよ」といわんばかりの色彩をあふれさせながら。（敬称略）

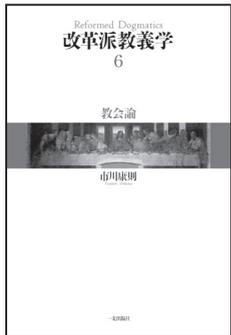
（B4判・二一〇頁・定価二六二五円（税込）・土曜美術社出版販売）
（さかい・のおおし詩人）



教会論

（改革派教義学）第6巻

市川康則
Yasunori Ichikawa



教会とはなにか

教会形成は神の国の伸展と、そのための宣教行為の中心的方法であり機会である。これをおろそかにして、キリスト教信仰に正しく生きることはできない。

A5判・上製・函入
定価 5,670 [本体 5,400 + 税] 円
ISBN978-4-86325-051-2



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

広くキリスト教会職制の意義を問いかける
西原康太著

聖公会の職制論 — エキュメニカル対話の視点から



加藤博道

本書は「この間、進展する教会間対話、エキュメニカル諸意見における『職制論』的諸課題を整理、分析、検討する作業を通して、最終的には『アングリカニズムの職制論』理解、及びその課題と可能性を明らかにする」ことを目的としている。それは今日多くの事柄について諸教会間の共通理解が形成されつつある中で「残る難関は、『職制論』」ことに『エビスコパシ』をめぐる諸問題であることは間違いない」からであり、全教会的なフル・コミュニオン（完全な相互承認・共同聖餐の実現）のための重要な鍵の一つがアングリカニズム（英国宗教改革神学・聖公会）のエビスコパシー理解にあると、著者が考えているからである（序論）。同意すると同時に、しかし本書が取り扱っている諸課題は、アングリカニズムだけの問題ではなく、ある意味では聖公会とローマ・カトリック教会、ルーテル教会他との対話、歴史的論争点を巡る研究の紹介をケース・スタディとしながら、おそらく大半のキリスト教諸教派に通じる教会の根幹に関わるものであると感じる。エビスコパシー（監督性）の問題とは、その教会の使徒性——使徒的な教会である

とはどういうことか——に関わり、教会の態勢、宣教的姿勢に開わってくる。人格的な歴史的主教制・独自の監督制をとらなうとしても、いずれの教会もそれぞれの仕方では使徒的であると信じて歩んでいるのであり、それらは人格的（personal）、同僚的（collegial）共同体的（communal）に担われてきたと、現代のエキュメニカル対話の成果に寄り添いつつ著者は述べる（第一章）。ローマの主教座（ローマ教皇）の権威を巡る対話と研究も、その線上にある。どのような教会的権威、首位性も教会全体の「信じる者たちの感覚」（sensus fidelium）を離れてはあり得ず、その意味で「シノダリティ」（共歩性 synodality）——具体的には教会の諸会議——と切り離れることはない（第二章）。一八九六年に出された教皇書簡『アポストリチエ・クーレ』は聖公会の聖職按手の完全無効宣言で、両教会の関係、対話の「棘」であり、さらに二〇〇〇年になってバチカン教理省が発表した『ドミヌス・イエズス』がそれを後押しするような内容であったことは世界中のエキュメニカル関係者に衝撃を与えた。しかしこれらも感情的な対立につながるよりは、より

神学的な対話の契機となっていくべきと思われる。すなわちそこには、職制理解、教会の祭司性理解、聖餐理解、犠牲理解等々がすべて関係し、たんに二教会間の対立・論争の問題をはるかに超えている（第三章）。歴史的な分裂や論争に加えて、現代の新しい課題、とくに倫理的課題が重なる。女性の司祭・主教職への按手、同性愛を公言している人物の聖職按手、また同性婚への教会の祝福（式文）の問題等である。著者はエキュメニカル解釈学について詳述し、「教会間の分裂とは、キリスト教信仰のテキスト、シンボル、実践の解釈の衝突によってもたらされた」が、「そのような議論を相対化、対話と合意への道を拓く」ものとして、さらに今日では「世界教会の文化的コンテキストの違いを意識した」異文化間解釈学に対応したエキュメニカル解釈学が必要であるとする（序論）。

著者はこれまでも国際的なエキュメニカル対話の重要な委員の務めを担い、今また世界教会協議会の中央委員である。

序論と結論の間に置かれた十章は、これまで紹介した他に、エキュメニカル対話における用語法（第五章）、東方正教会との対話（第八章）、BEM（リマ文書）における職制論的議論の紹介（第九章）、聖公会における同性愛主教按手を巡る状況と課題の紹介（第十章）を含み、内容は幅広く充実している。そしてカトリック・聖公会の合意文書『一致と宣教における共なる成長』（第四章）、ルーテル教会との合意文書『共なる宣教に召されて』（第六章）の主題が示すように、今日における教会の宣教的姿勢に深く結びついている。繰り返すが、聖公会の職制の問題を取り扱いつつも、広くキリスト教会の今日、世界における存在意義を問いかける書であると感じ、広く読まれることを望むものである。

（かとう・ひろみち）日本聖公会東北教区主教
（A5判・四六四頁・定価六〇九〇円（税込）・聖公会出版）

聖公会出版

— 近 刊 案 内 —

なぜ教会へ行くの — パンとぶどう酒のドラマ

著●ティモシー・ラドクリフ 監修●若城聡／伊達和良
訳●声屋聖マルコ教会翻訳会
（四六判・並製 2940円）

カンタベリー大主教がレントラックとして依頼した本。カトリックの修道士である著者は「見えないドラマが、私たちの人間性の核心部分で展開している」と語る。人が、神に感謝や賛美を表す本来の意味を解き明かす。



不信心な人 — ケリー神父とその生涯

著●ヒバート・ケリー 編●ジョージ・エヴェリー 訳●信岡章人
（四六判・上製 2100円）

1891年英国ケラムに「聖使修士会」を創設したケリー神父の生涯とその働きを記した書。伝統的なアングリカニズムを守りつつ、エキュメニカル運動を牽引した同神父は、現代の聖公会の神学に多大な影響を及ぼした。



〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
☎03(3235)5681 FAX 03(3235)5682
http://seikokai-publishing.jimdo.com
nsk-bookshop@company.email.ne.jp

我らの教会に今一度「福音」主義神学を
木下裕也著

植村正久の神学理解

『真理一斑』から「系統神学」へ



吉駒明子

内村鑑三の本は出るのに、なぜ植村正久についての毀誉褒貶から自由な本が出ないのかと不満であったが、ようやく植村正久の「神学」理解を、初期から晩年に至るまで見渡し、平易に紹介する本書を手にしてうれしく思った。

日本キリスト改革派教会の牧師、神学校教師である著者は、「かねてから旧日本基督教会の神学的伝統との対話の必要を覚えさせられてきた」という。私も政治思想史で論文を書きながら、日本在来の宗教思潮、西欧の科学・文学・宗教思潮が混在する中で、一つの「正統的」神学を育て上げた日本基督教会の遺産の大きさを思った。近年、改革派教会と日本キリスト教会の交流が回復されたなかで、時宜を得た出版でもあろう。

本書は、『真理一斑』および、東京神学社の講義ノート「系統神学」によって植村正久の神学理解を検討・紹介することが主要な内容を占めている。この課題に側面から迫るのが、彼の神学の骨格を示した「キリストとその事業」についての「補説一」と、「改革派神学」との異同を踏まえて、伝統継承と我等の課題について考える「補説二」である。

かつて私が『海老名弾正の政治思想』で福音主義論争を扱っ

うれしい。

内容紹介は、『真理一斑』、「系統神学」を中心とする神学論とともに、神論、人間論、キリスト論にそってまとめられており、前者では、啓示、唯物論批判、進化論への対応と批判、靈性の物質と現世に対する優位、キリストの至聖から道義の重視と人の「罪性」、十字架の意味などについての植村の理解が丁寧に紹介されている。「系統神学」は、植村の東京神学社時代の講義を学生が筆記した「遺稿」であるが、これに『植村正久著作集』に掲載された論考を加えて、植村神学の到達点がまとめられている。『真理一斑』の紹介にほぼ対応する形で内容が紹介され、各章の終わりに著者のまとめが付され、初期の神学との相違や、残された問題点が明らかにされている。このようにまとめられた神学思想は、「補説二」で改革派神学の立場から整理し直されて、私たちに継承すべき課題を示唆している。かつて私自身も、岡田稔の口から「植村の贖罪論は不徹底だ」

たとき、「キリストは人となりし神なり」、余輩はこれを「礼拝し、祈りを捧ぐ」とする植村と、「神子の意識」を以て神を「我が父」と呼び、その点でキリストと我は「先輩と後輩」だとする海老名の主張とが違いすぎ、かつ植村のキリスト論があまりにも普通で、その特徴や不足点の神学的検討をあきらめてしまった。本書では、植村が聖書によってキリストの神性を明らかにし、自由主義神学の「ロゴス論」を斥け、「福音主義」の中核となるべき内容を明示したと説いている。他方キリストの「品性」から「神性」を説いたことで、「受肉の贖罪的意義」を十分に語りきれなかったとし、そこに植村の「道義」重視のキリスト教信仰の特徴を見ている。

一八八四年に出版された『真理一斑』は、日本人が初めて自分の言葉で書いた本格的なキリスト教紹介（弁証）書である。その同時代人への影響力の大きさは、山路愛山や松山高吉の「美、信、虔、剛、誠、深の文徳」を称えた批評からも知られる。パスカル、カーライル、シヨーペンハウアー等が引用され、漢語起源の慣用語も縦横に使われる迫力のある難解な文章を十分に読み込み、かつ、ここぞという箇所引用があるのもという言葉を聞いたことがある。これについて著者は、植村が人の全的墮落、神に対する不従順とその結果としての死を語り、特に後期に罪理解が深まっているとする。ただ、植村が神学を「実験的」理解に基づかせたことから、「罪」の客観的構造が不分明になり、その分「贖罪」理解を不徹底にしたとしている。また、あちこちで問題視される「進化論」は、当時の思潮との関連で検討されねばならないが、神の国を別乾坤とし、我らには分からぬものの、必ず再臨はあるという「終末」についての、神学論の未発達ゆえかと私は考えている。ともかく、このような欠点は、西欧の教義を日本人に理解可能な言葉で表現しようとしたことに伴うものでもあり、私たちが主体的に積み上げるべき課題としての神学形成へと、私たちを誘うのである。

(よしなれ・あきこ) 恵泉女学園大学名誉教授
(A5判・二七二頁・定価四四一〇円(税込)・一麦出版社)

今すぐ
アクセス!

●2013年1月号から前月号まで、ホームページで閲覧できます。

本のひろば ホームページ

<http://www.bunshyo.or.jp>

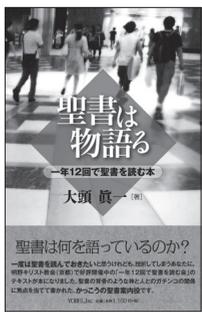
「キリスト教文書センター」のホームページから書評誌『本のひろば』をクリックしてください!

一般財団法人
キリスト教文書センター
〒162-0814 東京都新宿区
新小川町9-1
TEL・FAX 03-3260-6520

ギリシヤ人にはギリシヤ人のように

長らく家族の中でただひとりキリストを受け入れなかった私にとって、日本人の中にある「福音」に対する抵抗はとても身近なものです。自身の経験的傾向をいくつか挙げると、①少しでも押しつけがましさを感ずると逃げ出す ②感情を煽られることを嫌う ③何でも疑う ④でも活字は好き、となりませう。

このタイプの人はずもも求道者になることさえ避けずから、教会の中ではあまり見かけることがありません。裏を返せばここに伝道ができれば宣教の可能性が広がることになりませう。そのために私の仕える明野キリスト教会では昨年、「一年12回で聖書を読む会」を始めました。ひとつのきっかけは『ふしぎなキリスト教』のヒットです。人々はキリスト教に関心を持っています。だから、教会に足を踏み入れることを妨げる要因を取り除くことを考えればよいのではと思つた訳です。そこで、チラシに①どのような「立場・信仰を持っていても参加でき、信仰を押しつけるようなことは決してない」と明記し②参加費は無料③講師は聖書の専門家（赤面ものですが）であることに加え④「日野原重明先生の推薦のことば」を掲載しました。



大頭眞一

すると近隣から十三名もの参加者があり、一年間のコースを全うされただけでなく、そのうちの十名はさらに学びたいと願われ、今年十月から二年目に入られています。今回からの新たな受講者は三名おられます。

会は月一回、土曜日の午前十時半から正午までの九〇分間。もちろん十二回で聖書が全部読めるわけではありませんが、一章だけを選んで朗読し、その後テキストを用いて解説します。その際、①聖書の背骨にあたる「神と人との間の愛し合う関係」に焦点をあてる ②議論はしない。例えば創造論対進化論のような対立図式を設けず、聖書が語るの「神は人を愛し、人から愛されるために人を創造した」ことであるとして、いつも速やかに「愛の関係」のポイントに戻る ③キリスト教会が冒してきた過ちについても進んで率直に語る ④震災や原発といった時事問題を取り上げ、聖書からの洞察を語るが断定しない ⑤一方でその場の雰囲気によつては私の個人的な経験を踏み込んで話す。

この学びの最大の特徴は、神学による伝道であるという点です。よい神学には伝道のための力が備わっていると考えるから

です。私の神学を形づくっているのは、マイケル・ロダール著『神の物語』（拙訳・日本聖化協力会出版委員会・二〇一二年第二刷）です。物語の神学の流れに立った神学校一年生向けの入門書です。そこにある聖霊による神人協働説や神の痛みの神学の切り口に加え、救済論を刑罰代償説に限定せず広く東方教会にまで遡る客観性は、『ふしぎなキリスト教』を手取るような人々（すなはち私の周りに住む人々）に訴えるものがあるようです。

明野キリスト教会のホームページをご覧になったヨベルの安田社長が声をかけてくださったつてこのテキストが本になったのが、『聖書は物語る——一年12回で聖書を読む』です。タイトルには特別にお願いして「一年12回で聖書を読む」という言葉を残していただきました。それは、この本を何よりも伝道テキストとして用いていきたいからです。「何でも疑う」かつての私のような求道者以前の未信者にとつて市販されている本はひとつ

の信用になります。例えば信者の奥さんが、教会に来ないご主人にこの本をプレゼントして、「読んでみてよかつたら『聖書を読む会』に出てみない」と誘うことも可能です。この試みが有効かどうか、ごいっしょに取り組んでくださる教会があれば願っています。そうすることによって、さまざまな経験を共有でき、改善していくことができるでしょう。人は一人で働くように造られてはいない、このことを私は、聖書とロダールから学びました。

ただしこの試みには即効性はありません。求道者以前の未信者が相手だからです。相手の人格を認め、じっくりと対話を続ける忍耐と熱意が必要だと思います。

（おおよす・しんいち）日本イエス・キリスト教団明野キリスト教会牧師
 『聖書は物語る——一年12回で聖書を読む本』・A5判・一二二頁・定価 一五五円（税込）・ヨベル

ヨベルの月刊・既刊案内

潮義男 著 ◆ 説教マタイによる福音書 1章〜14章

神の国の奥義 上

好評発売中

西那須野教会とアジア学院研修生が共に集う礼拝でなされた説教をまとめたもの。教会員と研修生による祈りの合作でもあり、マタイ福音書の主題が豊かに語られています。続刊近日刊行予定。●A5判上製・一三六頁・二八〇〇円（税別）

ナチスドイツ時代の経験を通して、ユダヤ人として、精神医として、語りかける！ 絶賛発売中。

私は戦争のない世界を望む

アルノ・グリーン著 村椿嘉信 / 松田真理子訳

戦争をなくすために！ 戦争は避けることができる。著者は、「それは、私たちが考える以上に簡単なことだ」と主張する。私たちが感ずること、平和への夢、語りながら、戦争を阻止することは可能である。と。待望の邦訳！

●46判変型・美装 200頁 900円（税別）

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
 〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
 TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
 ＊自費出版の専門出版社＊

日本のキリスト教の人物辞典 『日本YMCA人物事典』の刊行に寄せて

以前、日本のキリスト教の人物を知ろうとすると、まず参考にした書物は、警醒社書店から一九二一（大正一〇）年に刊行された『信仰三十年基督者列伝』だった。それは、同書店の創業三十年を記念した企画で、同じく「信仰三十年」に達するキリスト教徒に呼びかけ、約八百六十名の寄稿をえて作成されたものである。寄稿がなくても必要な人物については編集部で補ったという。

これには「信仰三十年」であるならば誰でも寄稿できたので、教界では無名の人々も記載されている。このことは、個々の人物の伝記を知るためだけでなく、日本のキリスト教徒の実際の入信理由、階層、構造、動態を知るために適した資料でもあった。ただし、本人自身の記したものにありがちな思い込みも少なくない。

ほかに、日本組合基督教に所属し故人となった教職者の略伝をまとめた『天上之友』（日本組合基督教教師会、一九一五）もある。これは以後二冊出されている。それ以外にも各教派の年鑑や『基督教年鑑』類の記録も短文ながら参考になる。その点では、比屋根安定の著した『教界三十五人像』（日本



鈴木範久

基督教団出版部、一九五九）は、数こそ少ないが読ませる人物辞典といつてよい。率直のところ、同人の日本キリスト教史には課題が多いが、本書は、『護教』の記者として接した生身の人物が活き活きと描かれていると思った。

しかし、現在、何よりも頼りになるものは『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、一九八八）である。かなり手広く収載されていて、まさか記載はないだろうと思って引いてみると記事があつて助かることが何度かある。これも発行されてから、早くも二五年が経った。この間、新たに収録すべき人物や事項も増え、現在改訂版の作業が進捗中である。

そのなかで、今回、YMCA史学会の手で『日本YMCA人物事典』（二〇一三）が発刊された。辞典を通読することは滅多にないことであるが、とにかくページを繰る程度とはいえない内容を見て驚いた。予想に反して意外におもしろいのである。

日本のYMCAというと、キリスト教のなかでも一団体程度に思われるかもしれない。しかし、実は、日本の近代の歴史のなかでも重要な役割を演じた人物を送り出した団体なのである。たとえば、昨年、NHKとしては珍しい力作「日本人は何を考

えてきたのか」という番組があつた。そのなかで大正期に登場する八名のうち、内村鑑三、新渡戸稲造、吉野作造、福田徳三という半数にあたる四名が、いずれも本事典にも登場している。戦後には片山哲、大平正芳の二人の総理大臣もいる。小林多喜二、芹沢光治良、木下順二、城山三郎、森有正らの名もある。いちいち挙げるときりがない。

もちろん有名名人ばかりでなく、YMCAが平信徒組織であることから、文化、経済、医療、福祉をはじめとする多方面に進出、文字通り地域の塩として活躍した人々がいる。大地震や災害には、YMCAとして組織的な支援活動も展開されている。台風による洞爺丸事件の行動で知られるリーダーをはじめ、日本人および社会に献身した外国人の名もみられる。

かつて『昭和史』（岩波新書 一九五五）の叙述をめぐり亀井勝一郎により「人間の不在」という問題提起がなされたことがある。同じことは、従来の日本キリスト教史にも言えると思

う。そこでは登場する人物は、せいぜい教職者であつて、一般信徒の名前はまれである。組織としての日本YMCAには、戦争に対し反省さるべき点も少なくないが、個々の人物には、反戦、平和に努めた人物もいた。今回の『日本YMCA人物事典』には、そのような人々が掘り起こされている。本書は、日本のキリスト教史の従来の叙述にも大きな反省を与え、今後の方向に大きな示唆を与えるものとなっている。

本書の執筆は、主としてYMCA史学会の会員の手でなされた。会員の方々の長年の研究がもたらした大きな成果である。まだまだ補いたい人名もあると思われる、気が早いかもしれないが、増補版の刊行が期待される。

（すずきのりひさ＝立教大学名誉教授）
（A5判・二六六頁・定価二〇〇円）（本書ご希望の方は、日本YMCA同盟「人物事典係り」まで。電話〇三三五三七七六六四〇）



キリスト教書総目録 2014年版 創刊25周年記念特集号

内容

総記年鑑 辞(事)典 図説年表 全集(著作集) 叢書 講座 聖書 聖書学 神学 宗教学 思想 倫理 伝記(ライオン) 信仰入門書 人生論 説教集 文学小説 評論(トモイ) 詩 劇 音楽 美術 建築 教育保育 心理 社会福祉 児童 絵本 讃美歌 式文/DVD CD カセット ビデオ/キリスト教関連雑誌 新聞 書名索引/著者索引/掲載出版社名簿

巻頭トモイ
佐藤 優氏 橋爪 大三郎氏
若松 英輔氏

■ A5判 一般頒価1冊300円 送料240円
■ お近くの書店様でお求めください。

キリスト教書総目録刊行会
事務局 〒162-8710 東京都新宿区
東五軒町6-24 トーハンビル内
TEL.03-3266-9521

既刊案内 (2013年10月~11月) (定価は税込)

著 訳・編 者	書 名	判型	頁	定 価	版 元	発 行 日
加藤 常昭	信仰への道の —使徒信条・十戒・主の祈り	四六	584	3,360	教 文 館	10/10
加藤 常昭	祈りへの道	四六	288	2,100	〃	10/10
K.シュミート 山我哲雄 著訳	旧約聖書文学史入門	A 5	432	1,365	〃	10/10
岡山慶子 編 著	やさしさの暴走 —社会を変え、人を幸せにする力	四六	192	2,205	〃	10/10
佐藤全弘、藤井茂 著	新渡戸稲造事典	A 5	774	5,880	〃	10/16
カルヴァン・改 編 神学研究所	カルヴァンと旧約聖書 —カルヴァンはユダヤ人か?	A 5	220	3,150	〃	10/25
F.F.ブルース 伊藤明生 著訳	ニューベンチャー聖書注解 —コリントの信徒への手紙一、二	A 5	330	5,460	日 本 キ リ ス ト 教 団 出 版 局	10/11
松本 敏之	マタイ福音書を読もう1 —一歩を踏み出す	四六	234	1,890	〃	10/17
小島 誠志 著 小林 恵 写	祈りの小径	A 5	64	1,890	〃	10/25
上村 静	キリスト教の自己批判 —明日の福音のために	新書	136	998	新 教 出 版 社	10/18
北澤宏一、栗林輝夫 著 日本クリスチャンアカデミー編	原子力発電の根本問題とわれわれの選択 —バベルの塔をあとにして	四六	217	1,890	〃	10/25
クドウあや 作 石井邦夫 解説	せいなるよるのたからもの	A4変	32	1,365	〃	10/30
M.ルター 著 石居正己 編訳	ルターの祈り —ルター選集1	四六	124	1,260	リ ト ン	10/1
上智大学キリス ト教研究所 編	日本における聖 書翻訳の歩み	四六	156	2,100	〃	10/25
小川 修	ローマ書講義 Ⅲ —小川修パウロ書簡講義録3	A 5	408	3,150	〃	10/25
ティモシー・ラドクリフ 著 芦屋聖マルコ教会翻訳の会 訳	なぜ教会に行くの —パンとぶどう酒のドラマ	四六	408	2,940	聖 公 会 出 版	10/1
袴田 康裕 編	世の光となる教会を目指して	四六	402	3,360	一 麦 出 版 社	10/1
朝岡勝、佐藤美和 著 朝岡陽日他 著	「日の丸・君が代」問題 を考えるシンポジウム	A 5	72	840	〃	10/1
D.K.マツキム 著 出村 彰 訳	魂の養いと思索のために —『キリスト教綱要』を読む	四六	218	1,575	教 文 館	11/10
高橋 洋代	『星の王子さま』からの クリスマス・メッセージ	四六	176	1,050	〃	11/20
加藤 常昭 編	ドイツ告白教会の説教 —シリーズ・世界の説教	A 5	508	4,830	〃	11/25
大宮 溥	新生の福音 —ローマ書講義説教上	四六	232	1,890	〃	11/25
小山 英之	教会の社会教説 —貧しい人々のための優先的選択	小B6	188	1,260	〃	11/30
マルゲリート・ハマー 著 村岡 崇光 訳	折られた花 —日本軍慰安婦とされたオランダ人女性たちの声	四六	216	1,995	新 教 出 版 社	11/5
月本 昭男	詩篇の思想と信仰Ⅳ —第76篇から第100篇まで	四六	380	3,360	〃	11/30
福万 広信	聖書	A 5	96	840	日 本 キ リ ス ト 教 団 出 版 局	11/25
フェルディナント・ハーン 著 大貫隆、田中健三 訳	新約聖書神学Ⅱ上	A 5	642	12,600	〃	11/25
飯 靖 子 / 飯村拓生 演奏	CD版 讃美歌21による礼拝用 オルガン曲集 第1巻 礼拝		38曲 収録	1,575	〃	11/25
八木 谷 涼子	もっと教会を行きやすくする本 —「新来者」から日本のキリスト教界へ	A 5	98	1,575	キ リ ス ト 新 聞 社	11/22
関西学院大学キリス ト教と文化研究所 編	自然の問題と聖典 —人間の自然とのよりよい関係を求めて	四六	340	2,520	〃	11/25
ヒヤート・ケリイ 編 信岡 章人 編訳	不信心な人 —ケリイ神父とその生涯	四六	256	2,100	聖 公 会 出 版	11/8
黙想と祈りの編 集い準備会 編	テ —巡礼者の覚書	A5変	144	1,890	一 麦 出 版 社	11/23
大頭 眞一	聖書は物語る —一年12回で聖書を読む本	A 5	112	1,155	ヨ ベ ル	11/1
アルノ・グリユーン 著 村橋嘉信、松田真理子 訳	私は戦争のない世界を望む	四六	200	945	〃	11/1
日本聖書神学校キ リスト教研究所 編	礼拝の詞 1 —待降節から三位一体主日まで	A 5	112	1,260	〃	11/11

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zeninranki_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-136 敷島センター17号F	022-223-2736	共用		fcqwks524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	平新町短箱22 千葉カシヤセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://www/seikokai-pub.jp/	nsk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.jcom.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kirisu@kyoshotenjama@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.ne.jp/~yodobara.cs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00680-8-47
静岡聖文舎	420-0812	静岡市葵区古庄3-18-12	054-264-0264	054-264-4416		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		ktjordan@inbox.kyoto-intet.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakacs	ochtbok@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-331-9833			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中央区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shrit.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2134	浦添市港川2-25-1	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283
エマオ・BOOKセンター	904-0004	沖縄市中央3-14-2	098-929-3776	共用	http://www.okinawacbs.com/	emacobs@yahoo.co.jp	

新教出版社

福音と世界

2014年2月号

特集 神とはだれか

〔寄稿〕 富田正樹、坂田奈々絵、
遠藤比呂通、柳沢美登里、加藤喜之

追悼 ネルソン・マンデラ：デ・グルーチー
映画「芦の海」に寄せて…………… 渡辺信夫

〔新連載〕 中国教会通信…………… 松谷暉介
〔好評連載〕

自民党改憲草案を読む…………… 横田耕一
ミヌル…………… 大城実

A5判・本体571円・〒68円(2014年3月まで)
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

イエスとは誰か

ジョン・ドミニク・クロツサン著／村岡崇光訳



彼はどんな人間だったのか？どんな生活をしていたのか？史的イエス研究に常に一石を投じてきた著者の、自らのイエス観を率直に語った好著。

◎ 四六判・192頁・1900円＋税

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL: 03-3260-6148
FAX: 03-3260-6198

編集室から

クリスマスが過ぎ去り、年が明けると、まだ幾分の余裕はあつても気持ちはイースターの準備へとむかう。

バロック絵画の巨匠ルーベンスが描いた祭壇画『キリスト昇架』と『キリスト降架』という絵を知ったのは、テレビアニメで放送していた『フランダーズの犬』（ウイイダ原作／岩波少年文庫）が最初だった。

主人公の貧しい少年ネロが死の間際にやっと見ることができた絵画とは、どんな絵なのだろうか。後に読んだ小説で画家の名前を記憶し探したことを覚えていてる。

今では、二枚の絵は私の中で『フランダーズの犬』と一体となり、鑑賞の機会を得るたびに真冬の礼拝堂で死んだネロとパトラッシュを思い出す。

絵の拝観料は銀貨一枚。「教会は貧しい人や虐げられている人に寄り添う存在ではなかったのか。」少し毒づいた後で真実を追求してみたくなり、インターネットで検索した。

モデルとなった当時のアントワープ大聖堂では、教会の出入りは誰でも自由だが、絵画鑑賞にはやはり拝観料が必要だったらしい。そして、収入は貴重な運営費として、伝道の費用や建物の管理費などとなり教会を支えていたそうだ。

当然と言われればそれまでだが、突然の現実私に私の感情移入は一気に教会へ傾いた。

ルーベンスの絵を見るために世界中から多くの人々が訪れる。美術館にあつても不思議ではない名画に、お金を支払う価値は充分あり、『フランダーズの犬』を読まなければ違和感を感じないのではないだろうか。しかし、作者は批判を抱き、物語を通して告発している。

ネロとパトラッシュは、クリスマス・イヴに絵を見てクリスマスに絵の下で亡くなった。『キリスト昇架』と『キリスト降架』の絵が、この世の苦しみから解放され、永遠の安らぎを手に入れたこと象徴のように安堵へと導く。

(吉崎)

お父さんの手紙



イレーネ・ディーシェ著 / 赤坂桃子訳

ドイツ児童文学書受賞作 ナチ時代、外交官としてベルリンに駐在するお父さんから毎週届いた手紙が、ある日を境に……。暗い時代を勇氣をもって精一杯生きた祖父・父・少年の愛情を秀逸なストーリーで描いた作品。

1月24日

◆小B6判・本体1000円



旧約聖書入門1

大野恵正著

現代に語りかける原初の物語

著者聖書を平易に、かつ格調高く語ることに定評ある著者が、旧約の豊かなメッセージの核心を現代人に取り次ぐ。今後、旧約入門の定番となるシリーズ。全5巻予定。

◆小B6判・本体1800円

原発社会に生きるキリスト者の責任

藤井 創著

2月14日

いのちを選び取る生き方

豊富な図版と簡潔な解説でチェルノブイリと福島の実相を正確に学び、私たちに求められている生き方の方向転換を考える。教会で共に学習し、話し合うために最適の書。

◆A5判・本体1300円

詩篇の思想と信仰IV

月本昭男 著

第76篇から第100篇まで

詳細な語釈、各篇の構造と成り立ちの分析、そして思想と信仰についての深い洞察。最高の著者による最高の注解。

◆四六判・本体3200円

イエスとは誰か

史的イエスに関する疑問に答える

ジョン・ドミニク・クロツサン 著 / 飯郷友康訳

開かれた食卓と無償の癒しを通して神の国を上演してみせた男の肖像を、最新の聖書学の知見に基づき、生き生きと伝える。

◆四六判・本体1900円



最も大切なもの

樋口進著

若人たちへのチャペル・メッセージ集

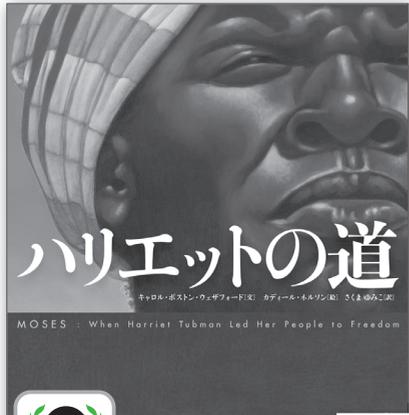
著者は旧約聖書学者であると同時にキャンパス・ミニストリーに心を燃やす伝道者。関西学院大学・大学院で毎日、毎週行われるチャペルで、心を込めて語ったメッセージから33編を精選。

◆小B6判・本体1600円

本のひろば 第六七三号 二〇一四年二月号

一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
二〇一四年一月一日発行(毎月一回) 一日発行

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ http://bp-uccj.jp (価格は税別)



ハリエットの道

キャロル・ポストン・ウェザフォード 文
カディール・ネルソン 絵
さくま ゆみこ 訳 **新刊絵本**

自らの手で自由を得た黒人女性の魂の物語
自身も黒人奴隷として抑圧されつつも、真の自由
を求め、神を信頼して、多くの黒人奴隷を救い
出したハリエット・タブマン。「女モーセ」と呼ば
れた彼女の半生を、魅力あふれる絵で描き出す。

◆298mm×273mm 上製・48頁・本体1,800円+税

受賞
2007年 コルデコット賞銀賞
2007年 キング賞(画家部門)

この絵本をおすすめします
姜尚中 カンサンジュン
聖学院大学全学務長



「自由を手で得た自由を得た黒人女性の魂の物語...」
もう書くはない。あとすこした。
絵本の中に描かれたハリエット・タブマンの姿、
その姿に感動した。そして、
「ハリエットは、黒人女性として自由を得た。
自由を手で得た自由を得た。」
と、これは感動的な絵本だ。
天国ではないよ、ハリエット、
自由の地だ。

発行所 東京 東京都新宿区新小川町九一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話03-3133-6011 六五〇一〇 振替0017015112679
発行人 本村利春 編集人 中川 忠 印刷所(株)平河工業社
日本キリスト教書販売株式会社 電話03-3133-6011 五五七〇

定価七五円(税抜七二円)(〒60円)
一年分一三〇〇円(送料共)

講演会 並木浩一 連続講演会のご案内

第2回 「批評としての旧約学」

日時 2014年3月15日(土) 13時30分~15時30分
会場 教文館9階 ウェンライトホール
参加費 500円
申込み 教文館キリスト教書部へFAX、Eメールのいずれかでお申込下さい。
TEL 03-3561-8448 FAX 03-3563-1288 E-Mail xbooks@kyobunkwan.co.jp



●主催/教文館キリスト教書部、日本キリスト教団出版局 ●後援/日本キリスト教文化協会

講演会開催予定 ▶第3回 2014年6月7日(土) ※会場が異なります。詳しくはホームページをご覧ください。